

2013年5月12日 召天者記念メッセージ

聖書：ルカの福音書 20 章 27～40 節

説教：みな生きています

1 サドカイ派の人々の考え

この教会では毎年この季節に召天者記念礼拝を行っております。そのいわれについて少しだけ説明します。私たちの信仰の大先輩である中本亀子姉は2004年に神奈川から札幌に引っ越しをされ、この教会に集うようになりました。天に召されるまで2年に満たない短い間のお交わりでした。そんななかで、たとえば「私は天国に行けません」と気落ちしていますと、「何を言っているのですか。いっしょに天国に行きましょう」と言って励ますことがありました。天国のことをまるで子どものように素直な心で信じておられた姿を思い浮かべます。その中本姉が桜をこよなく愛しておられたので、この季節に召天者記念礼拝をもつということにしております。

さて、今も申し上げましたとおり、キリスト者は天国に迎えられることを望みとして信じています。今日はこの天国とはどんなところか、少し考えていきます。

いっぽうで、死者の復活とか天国のことを言うと、世の人々からこんな反論が寄せられます。「死人がよみがえるとか、天国に行けるなど非科学的な話だ。信じるなどばかげている。たいだい二千年前の人々は、学問もなく愚かだったのでそんな話を鵜呑みにしたのだらう。」

よくありそうな反論です。本当にそうなのか。先ほど読みました聖書に、サドカイ人と呼ばれる人が登場します。国や人種のことではなく、あるグループの名前です。彼らは旧

約聖書の最初の方にあるモーセ五書を大切にしておりました。では、宗教グループであったのかというとそれもちょっと違います。ひとことで言いますと、彼らは非常に現実的で、霊とか死人のよみがえりは信じません。聖書を大切にしていると言っても、例えば「殺してはならない」というような律法のことばを、良い生き方をするための道徳の規準のようなものとしてとらえていました。

どうですか。二千年前の人たちは野蛮であったとか、迷信を信じるような人たちだったというのはちょっと違います。今の時代で言えば理性的、あるいは科学的と呼ばれるような人たちがちゃんとしたのです。

2 サドカイ派の質問

そんなサドカイ派の人がイエスのところに来て、質問します。28節。「先生。モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が妻をめぐって死に、しかも子がなかった場合は、その弟はその女を妻にして、兄のために子をもうけなければならない。』」

日本でもそうですが、他の国でもかつてこのようなことが普通に行われていたそうです。家を途絶えさせないように、夫を亡くした妻がきちんと生活できるようにと配慮からこのようなことをしました。

律法を大切にしようとするサドカイ派です。当然これもきちんと守ろうとします。でも一方では復活を信じません。そこで、もし復活があるならこんな矛盾が起きると反

論するわけです。

具体的に考えるとわかりやすい。あるところに七人兄弟がいたとしましょう。長男に続き次々と下の弟たちも死んでいく。長男の妻は、モーセの律法に従い、そのたびごとに弟の妻になります。そうやって全員死んだ。では結局復活したときに、その妻はいつたいだれの妻になるのか。七人の兄弟でひとりの奥さんを取り合うのか。そんな馬鹿なことがあってたまるものか。だから復活などありえないと彼らは結論づけました。

これから見ていくように、この結論は間違っただけです。それでも彼らなりに物事を理論立てて考えようとしています。議論の進め方を見ると、二千年前の人たちは頭が悪かったなどというのが的外れだとわかるでしょう。

3 イエスの答え

1) めとることも、とつぐこともありません

これに対し、イエスはこんな風にお答えになります。34, 35節。「この世の子らは、めとったり、とついだりすつが、次の世に入るのにふさわしく、死人の中からふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。」

「次の世」とはひとことで言えば「神の国」あるいは「天国」ということです。天国には結婚という制度がないと言っているように聞こえます。そのことはまた後で触れることにします。

ここでイエスが焦点を当てておられるのは、実は天国での結婚制度のことではありません。天国は地上とどこが同じでどこが違うのか。そして、その違いはどこから来るのか。そこに焦点を当てておられます。

イエスはサドカイ人の質問を受けて、天国ではめとることもとつぐこともないと答えられました。それはなぜか。36節ではつきりと言っています。「彼らはもう死ぬことができないからです。」

サドカイ人は、もし兄が死んだらその妻をどうすべきかというところからスタートします。人は死ぬものだとすることを前提に物事を考えています。聖書を読むとき、私たちは無意識に自分が持っている常識を当てはめようとします。サドカイ人の言っている事は私たちが持っている常識とみごとに合っていますから、まったく疑いません。ところがイエスは私たちの常識をいとも簡単に打ち砕きます。「彼らはもう死ぬことができないからです。」

神の国のことを考えるときは、当たり前と思っていることをいったん捨てなければなりません。では、もし人が死ぬことなどもうないというのなら、何か変わるか。

サドカイ人はもし兄が死んだらと言いました。しかし、天の御国では兄が死ぬことはありません。兄が死なないのですから、妻が未亡人になることはない。あるいは、未亡人となった奥さんを弟に嫁がせなければならぬと気をもむ必要がない。イエスはそのことを指して「めとることも、とつぐこともありません」と言われました。

今、日本では天皇家の跡取りのことで問題が持ち上がっております。皇太子のところに男の子が生まれぬ。いったいだれが跡を継ぐのか。そうやって一部の人たちが騒いでいます。イスラエルも同じでした。もし子供が生まれなければと家断絶の大騒ぎです。だから「兄のために子をもうけなければならぬ」と言って、子供を残すことにこだわりま

す。

これが天国ではどうなるか。人が死ぬことはないのですから、だれか跡を継ぐのかなどと心配する必要がなくなってしまいます。だから子供を産むことを目的とした結婚も当然必要がなくなるわけです。

2) 夫婦はどうなる？

ここでひとことだけ付け加えておきたいと思います。イエスは確かに天の御国ではめとることとつぐこともありませんと語っておられます。皆さんはおそらくこんな風に考えるでしょう。「天国ではもう愛する夫と会えないのだろうか。愛する妻と結婚生活を続けたいと願っていたのに、天国ではかなわないのだろうか。」そんなふうには悲しむ方もおられるでしょう。あるいは逆に、「天国ではあんな夫といつしよにならなくて済むので安心した」という方もおられるかもしれません。

不思議なことですが、地上の夫婦が天国ではどのような関係になるのか、聖書にはあまり詳しく書かれていません。しかしある程度のことは推測することができます。先週の婚約式の中でも触れたことですが、神はひとりの人アダムをご覧になり、「人はひとりであるのは良くない」と考えられ、エバを妻として造ってくださいました。それが結婚の始まりです。神が定めてくださり、結び合わされて一体となった夫婦です。それなのに天国では別れ別れですというのは、辻褄が合いません。愛する夫に先立たれて悲しむ女性がいるなら、当然神は天の御国において私たちの悲しみをいやし、望みを回復させてくださるはずです。天の御国で愛する夫と再会できる。愛する子どもたちともう一度会える。それは

はっきり申し上げておきたいと思います。

中には、私たちが新しいからだをいただき天の御国に入るとき、パソコンのスイッチを切ってリセットするように、全部記憶もなくなってしまうと考えるか違いますが、絶対にそんなことはありません。もちろんからだは新しくなりますが、私たちは私たちのままで天国に引き上げられていきます。第一テサロニケ4章16、17節にこうあります。

「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといつしよに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

「彼らといつしよに雲の中に一挙に引き上げられ」とあります。彼らというのは先に亡くなった方々を指します。もし記憶が全部リセットされるというのなら、だれといつしよだろうが関係なくなってしまう。

そうではありません。私たちは愛する家族を失ってしまった悲しみを味わっています。どんなことをしても忘れることができません。どんなに時間が経つてもあるとき思い出してしまい、涙を流します。主はそれをご存じなのです。その悲しみを抱えながら天の御国の門をくぐります。門をくぐる時、主は悲しみを喜びに変えてくださいます。先に亡くなった愛する家族と再会できるようにと取りはかかります。そうやって私たちは主のそばにいつしよにいる。

神の目にはそのことがすでに見えています。「神に対しては、みなが生きているから

です。」こう言われると私たちはとまどいますが、神にとってはあまりにも当たり前です。

中には、亡くなった家族や友人と再会することを恐れる方もいるかもしれません。関係がこじれたまま亡くなった方もいるからです。大丈夫です。安心してください。生きているとき、どんなに傷ついてしまった人間関係でも、神はすべて最もよいものに変えます。

聖書に何と書いていますか。「彼らは復活の子として、神の子どもだからです。」こう言ってくださっています。天国では、すべて神の子どもと平等に呼ばれるのですから、地上での苦々しい人間関係はもうありません。そのことも安心していただきたい。

どうか主がお一人お一人にこの約束を信じる信仰を与えてくださいますように。